

千田嘉博（奈良大学）

1. 「江戸始図」発見の意義

「江戸始図」は、徳川家康が慶長 8 - 19 年（1608 - 14）にかけて築いた創築期の近世江戸城の縄張り（城の平面設計）を描いた絵図で、謎に包まれていた家康の江戸城を明らかにする資料です。本絵図の発見は、画期的な意義をもちます。「江戸始図」が描いた江戸城は、記載された大名・旗本の名前・官職等から、慶長 12 - 14 年（1607 - 09）頃と比定されます（徳川美術館・原 史彦 学芸員の分析による）。

近世江戸城は徳川家康の創建後、元和 8 年（1622）に本丸を拡張し天守を新たに建設し（元和度天守）、寛永 14 - 15 年（1637 - 38）に新ためて本丸の改造と天守の建設を行い（寛永度天守）、明暦 3 年（1657）の大火で天守や本丸御殿が焼失して、再び天守台を築き直すなど、大改修がくり返されました。このため徳川家康が築いた創築期の江戸城の詳細は不明になっていたのです。

近世江戸城の創築期を描いた資料としては、東京都立中央図書館所蔵「慶長江戸絵図」が知られています。松江歴史館所蔵の「江戸始図」は、「慶長江戸絵図」と同系統の絵図です。「慶長江戸絵図」は、本丸内の御殿などを描きましたが、石垣などの描写のゆがみが大きく、また石垣と建物との描き分けも明確でないため、江戸城細部の評価を難しくしていました。

松江歴史館所蔵の「江戸始図」は、「慶長江戸絵図」よりも描写が正確で、石垣や堀、城の出入口などの城郭構造を細部まで明快に描いています。「江戸始図」によって、徳川家康が築いた江戸城中心部の詳細を、はじめて的確に把握できるようになりました。

2.「江戸始図」で明らかになったこと

(1) 家康の江戸城は本丸に詰丸(天守曲輪)を備えて姫路城のようにしていた

「江戸始図」は、江戸城本丸の内部に大天守と小天守を多聞櫓で連立した詰丸(天守曲輪)を備えていたと描きました。「慶長江戸絵図」も、同様の詰丸を描きましたが、ゆがみが大きく、明確には読み取れませんでした。

「江戸始図」によって家康の江戸城は複雑な連立天守であったことが確実に became ました。大天守は詰丸南東隅にあり、北側に付櫓を備え、櫓門でつながった外柵形を經由して、北東隅の小天守とつながりました。北東の小天守から西側にも多聞櫓が伸び、のちの本丸西側二階櫓の位置で多聞櫓が南側に折り返し、南西の小天守につながりました。

南西の小天守と大天守との間には、もうひとつの外柵形があって、ここも出入口の石塁開口部を越えた櫓門があって、大天守と連立したと考えられます。このように江戸城本丸の中に、さらに石垣で囲った詰丸(天守曲輪)があって、この詰丸は大天守と小天守が多聞櫓で連立していました。現存する城郭では、国宝姫路城の連立式天守が近い例です。

しかし家康の慶長江戸城の詰丸は、天守群で囲い込んだ詰丸の面積がより広く、江戸城大天守の建築としての高さは約 67m に達していました(『愚子見記』)。これは現存する姫路城大天守の 31.5m をしのいだだけでなく、推測される豊臣大坂城天守の高さおよそ 33m を圧倒的に上回りました。

いかに家康の江戸城中心部にあった詰丸と天守群が巨大で嚴重だったかがわかります。

江戸城本丸の詰丸は、それだけでひとつの城として機能し、豊臣秀吉が贅をこらして築いた豊臣大坂城をも越える堅固な城でした。家康が江戸城の築城にかけた思いが伝わってきます。

(2) 江戸城本丸の南側に、強力な軍事機能を発揮した連続外柵形があった

現在見ることができる寛永期江戸城では、改修のために失われていますが、家康が築いた慶長期江戸城の本丸南側には、城壁を外側に張り出して互い違いにした出入口を5重に連続させた連続外柵形を備えていたことが「江戸始図」で、はじめて判明しました。

東京都立中央図書館蔵の「慶長江戸図」も部分的に外柵形を描きましたが、描写を省略した上に、石垣と建物を同じように描写したので、連続外柵形の詳細はわかりませんでした。

外柵形は、出撃を意識した積極的な出入口の形態で、織田信長の安土城、豊臣秀吉の豊臣大坂城や肥前名護屋城も大手門に用いました。まさに家康の江戸城が天下人の城の格式を継承していたと読み取れます。さらに家康の江戸城のように外柵形を連続させた出入口は、現存する城郭では加藤清正が築いた熊本城などに見ることができ、天下人の城を継承し、発達させた織豊系城郭であったと評価できます。

まとめ

「江戸始図」によって明らかになった家康の慶長期江戸城は、戦いを意識した強力な要塞機能を最大限に備えた城でした。豊臣氏との決戦に備えて万全を期した家康の意志が伝

わってきます。本丸の中にさらに設けた詰丸、そこにそびえた連立天守、本丸南側に開いた連続枡形など、家康の慶長期江戸城は、信長・秀吉の安土城や豊臣大坂城を圧倒的に上回る当時最強の城でした。

こうして家康が心血を注いで築いた慶長期江戸城でしたが、豊臣家を滅ぼして幕府の政庁としての役割が重視されるようになると、詰丸の複雑な連立天守や、連続枡形などの軍事施設は破棄され、殿舎空間へと姿を変えていきました。本丸詰丸の天守群が寛永期江戸城では御殿となり、本丸南側に備えた連続外枡形が能舞台になったのは、戦いの城から宮殿へと姿を変えていった江戸城の変化を象徴するといえるでしょう。

つまり「江戸始図」は、今日につづく東京のはじまりの再発見であるとともに、家康が築いた「戦う江戸城」の再発見といえるのです。

(千田嘉博：せんだ よしひろ／城郭考古学者、奈良大学 教授)